

2025/11/01

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

会報十一月号 来年の千支く丙午（ひのえうま）

目次

- ・千支（えと）について
- ・十干と十二支
- ・二〇一八年からの流れ
- ・二〇二六年「丙午（ひのえうま）」の時局の予測
- ・過去の丙午の年の出来事
- ・まとめ

※十干・十二支の資料

●千支（えと）について

この時期の恒例となった「来年の千支」シリーズ。十干と十二支其々の意味から、各々その年の時局や活動の流れが予測できるようになる。

千支は、生命や活動の生成化育、つまり、発生↓成長↓成熟↓衰退↓収蔵という、活動のエネルギーの循環過程を分類し約説した経験哲学である。これは、生命や活動の推移を時代に当てはめて解説したもので、個人の日常生活の細かいことには適用するものではない。ただ、元来迷いややすい人間は、情報が氾濫し続けている世の中においては、何か真実の一筋を通していく原理を心に持つことは有益である。千支はその一つになる。これを社会・時勢の推移に適用することで、時運の流れ（理）を見つけ、その理に順って自らの処し方を決め（義）、誠を尽くして己の道を具現化していくのである。

「千支」の「千」は根幹。生命や活動の内外対応（レスポンス・陰）の原理を十種類に分類したもの。「支」は枝葉。生命や活動が伸びてゆく生成化育の流れを、生命・物事の始まり（分化）から、組織の成長↓成熟↓老衰↓死（継承）↓次の始まりへ還るという流れを十二段階で説明する。

これら十干・十二支の最小公倍数六十種類の組み合わせで、時局の意義や、そこに対処する自覚や覚悟を帰納的に解明し啓示したものが千支である。

年にしたら六十年目に暦が還る（還暦）。月とすれば六十ヶ月、五年。日ならば六十日、二ヶ月。時間なら六十分、一時間で循環する。易経の卦も初爻から上爻まで六

段階で進む。

●十干と十二支

十干（じっかん）は、甲（こう）・乙（おつ）・丙（へい）・丁（てい）・戊（ぼ）・己（き）・庚（こう）・辛（しん）・壬（じん）・癸（き）の十種類。其々の意味をまとめると以下のようなになる。

【甲】↓旧体制が破れて革新の動きが始まる。とかく狎れ合いやすいので十分慎む。
【乙】↓まだ外界の抵抗が強いために紆余曲しながら進んでいく。

【丙】↓陽気が発展（明らか・強い）し、其々の領域に入っていく。

【丁】↓新旧両勢力の衝突。枝葉を剪定し、根固めをして、採光風通しを良くする。

【戊】↓陰陽繁雑する意。思い切って剪定する。

【己】↓屈曲して悪がたまり、乱れやすい時。反省し紀律を正す＝克己復礼。

【庚】↓前年を継続し、罪があれば償い、思い切って更新（維新・改新）する。

【辛】↓上に向かって求め冒す。闘争・犠牲が生じるので辛い。維新へ持っていく。

【壬】↓内在するものが増大して仕事が増える。が、野心家が多く出やすい。

【癸】↓原理・基準に照らして筋道・見通しを立て、一致協力して実行していく。

十二支（じゅうにし）は、子（ね）・丑（うし）・寅（とら）・卯（う）・辰（たつ）・巳（み）・午（うま）・未（ひつじ）・申（さる）・酉（とり）・戌（いぬ）・亥（い）の十二種類。其々の意味を簡潔に記すと以下のようなになる。

【子】↓増える。問題の処理↓人物の人选が問題。

【丑】↓「子」に発生したものが、やや長じ、これを整え養い伸ばす。

【寅】↓お互い敬する・慎む・助け合って、力強く進む。

【卯】↓未開墾地の開拓を始める時。

【辰】↓物事が非常に活動的・情熱的になるが、もう一つ実がない。まかり間違えば、思いがけない変化・災禍を生ずる。

【巳】↓従来の因習的生活にケリをつけて澁刺勇敢にやっていく。脱皮。再生と変化。

【午】↓反対勢力の高まり。

【未】↓枝葉が繁茂し過ぎて暗くなり、陰気（反対勢力）が伸びる。

【申】↓真っ直ぐに引き伸ばす。

【酉】↓中に醸されている新しい勢力の爆発、革命の年。

【戌】↓枝葉末節の過剰・抹消的繁雑を表す。剪定して残したものを生かす。

【亥】↓起爆性エネルギー活動。様々なエネルギーや問題を孕む。

十干は、五行説と結びつき、「木・火・土・金・水」の五行が、兄（え）と弟（と）に分かれて配された。即ち、十干の最初の「甲」は木の兄（きのえ）、次の「乙」は木の弟（きのと）、「丙」は火の兄（ひのえ）、「丁」は火の弟（ひのと）、「戊」は

土の兄（つちのえ）、「己」は土の弟（つちのと）、「庚」は金の兄（かのえ）、
「辛」は金の弟（かのと）、「壬」は水の兄（みずのえ）、「癸」は水の弟（みずの
と）となる。そこに十二支を配し、十と十二の最小公倍数の六十で一巡。つまり、甲
子（きのえね）から癸亥（みずのとい）の六十年で一巡し、翌年また甲子（きのえ
ね）に還る。これを「還暦、本卦還り」と呼んで循環させた。

●二〇一八年からの流れ

十干と十二支から見える活動のエネルギーの流れを人事に推して、その年の活動の
エネルギーの流れを掴む。

二〇一八年は「戊戌（つちのえいぬ）」。「どちらの文字も茂（しげる）であり、そ
れは繁茂による紛糾とその後の衰退を意味する。従って、よく剪定（省く・断捨離）
して賦活しなければならない。思い切った変革が必要な年であった。

二〇一九年は「己亥（つちのとい）」。「繁茂の後を受けて、紛糾にケジメをつけて
物事の筋を通し、自分の力を外に発揮していく年。

二〇二〇年は「庚子（かのえね）」。「庚」は「更（あらたまる）」に通じ、更
新・継ぐ・償うという意味。二〇一九年を継続して、その失（沈滞や怠慢）を償い、
諸事更新して、澆刺とした状態に持っていくべきことを示している。これを怠ると破
壊という大きな痛みを伴う革命が必要となる。

二〇二一年は「辛丑（かのとうし）」。「辛（かのと）」は、下にある陽のエネル
ギーが敢然として上に現出する形であり、上に向かって求め冒していく。そこには矛
盾・闘争・犠牲という痛みも含む。「辛」は「新」に通じ、「庚（かのえ）」を受け
継いだ革新を意味するが、上をおかす（下克上）ことでもある。

二〇二二年は「壬寅（みずのえとら）」。「内在于るものが増大する形であり、多く
の問題に処していく年。利口でずる賢い人間や、野心をもった時局便乗型の人間がた
くさん出る。彼らが社会に蔓延るようではいけない。よほど勇気を以て事に当たり、
小人たちに負けるようではいけない。良い意味での壬人が出るか、悪い佞人が出るか、
自分はどうするのか。これが二〇二二年の眼目であり、従って、壬の年は人事に最も
注意を払うべき年であった。

二〇二三年「癸卯（みずのとう）」。「万事において筋道を立てて考え、実行・処理
していくことが重要。それを誤ると混乱や動乱、或いはご破算となる。物事を明確に
し、筋道を立てて実行していく。これができるかどうかで、繁栄に進むか、混乱動乱
に陥ってご破算になるか決まる。繁栄に進めば、二〇二四年は物事を剪定して整えて
ゆく年となる。そうすれば狎れ合うことなく、また始まり（甲）を持つことができる。
混乱動乱に進めば、新たな問題が生じる（甲）。

二〇二四年「甲辰（きのえたつ）」。「旧体制が破れて革新の動きが始まる時。しか
し、とかく狎れ合いやすいので十分慎むときでもある。「辰」は、物事が非常に活動
的・情熱的になるが、もう一つ実がない。少し間違えば、思いがけない変化や災禍を

生ずる。従って、「甲辰」の年は、旧来のしきたりや陋習を破り、理想に向かって辛抱強く、かつ慎重に、様々な抵抗や妨害と闘いながら歩を進めていかなければならない年である。物事は非常に活動的になる。非常に騒がしい動きがあるが、もう一つ実がない。狎れると、思いがけない変化・災禍を生ずる年になる。

二〇二五年「乙巳（きのとみ）」。「今までの因習や悪習慣と決別して、新たな安定へ向けて革新的な取り組みを始める年である。重大な変革の動きが社会でも多く出てくる。それに対してはできるだけ正しい見識と勇気を以て善処していかねばならない。」

●二〇二六年「丙午（ひのえ午）」の時局の予測

「丙午（ひのえうま）」の年とは、西暦を六十で割って四十六余年のことである。一言で言えば、「**在来勢力が反対勢力の突き上げにあう年**」である。

「丙」は、甲乙の陽氣が一段と発展して盛んになること。そこで「丙は炳なり」という。「あきらか、強い」という意味である。しかし、陰陽相補原理から言って、盛んになりっぱなしということはない。造化のはたらきとは無限の循環である。生命が伸びるということは、同時にこれは老化することに通じる。物事は盛んな時に必ず衰える兆しを含んでいる。だから、盛んになったからと言って浮かれることを最も愚とするのが経書の教えである。しかし、反対に衰えるということは、やがてまた盛んになるとう生命の未来をどこかに含んでいるから、衰えたからと言って落ち込むのは道を知らぬ者である。「午」は「そむく、逆らう」という意味である。

従って、「丙午」とは、**在来勢力が盛んに伸びているが、それに対する反対勢力が内側から突き上げてきているということになる。一見すると、在来勢力が勢いを増して強いように見えるが、すでに反対勢力の突き上げが始まっていて、これに良く処理できるかどうかで、今後大きく時局は変わっていくという意味をもっている。**所謂「内憂外患の年」であり非常に警戒を要する年である。

暦学や干支学が普及して大衆化すると、物事はより通俗的に解釈されるようになる。すると、天下国家の話は少なくなり、身近な家の話が中心となる。ここに丙午伝説という迷信がある。家の代表勢力は父、夫である。その反対勢力は母、妻である。そこで丙午生まれの女と結婚すると、女が強すぎて夫は突き上げられて大変である。更に尾ひれがついて、丙午生まれの女は男と敵対して男を食い殺すという迷信まで広がった。だから、丙午生まれの人は他の年に生まれた人より少ない。迷信を信じ子どもをつくらなかった夫婦が多いのだ。

しかし、そもそも干支は、生命の営みの栄枯盛衰の循環を、時の機運を主として時世の変化に適用させたものである。私生活の結婚や出産に適用するものではない。

●過去の乙巳年の出来事

・一九〇六年 日露戦争を勝利に終えて日本が世界的勢力にのし上がってきたので、陽

気盛んな華やかな時、まさに丙（炳）である。しかし、国内は戦争の反動が現れ始めていた。勝ち戦により国民は浮かれ、軍人は傲慢になる。戦に勝つことでかえって日本は墮落し、国民生活は荒怠して享樂主義に流れ、だらしない状態に陥った。そこで、この二年後、明治天皇は「戊申詔書（荒怠相誡め自彊息まざるべし）」を出した。

ひとつの艱難を克服して炳という盛んな状態になると、必ずその反動現象も盛り上がってくる。

・一八四六年 仁孝天皇が崩御され、孝明天皇が即位された。大きな変わり目である。幕府勢力はあるが、討幕の動き（勤皇倒幕勢力）が突き上げてきているし、外国勢力も押し寄せてきている。この時代には人材も多く指導者もしっかりしていたので、外国勢力をかわして自主的変革（明治維新）にもっていった。

・一六〇六年 豊臣秀吉が死んで秀頼が後継者として右大臣になった。豊臣勢力の一つの安定と見ることもできるが、同じ年に二代將軍の徳川秀忠が内大臣になっている。豊臣勢力に対する徳川勢力の突き上げである。そして、豊臣が滅び徳川の天下となった。これは反動勢力が勝った例である。

・一一八六年 平家が滅び、源氏が勝った。ところが源頼朝に義経という反対勢力が現れてお互いにいがみ合うことになる。この時は反対勢力の義経が負けたが、勝った頼朝の源氏も間もなく北条氏に取って代わられることになる。

●まとめ

干支とは暦の学問であり、暦学の活用的一分野である。人間の世の中の出来事、変化、推移というものを時の機運を主として経験的に帰納し結論を出したものである。こういうことが分かって、事態や形勢を悪化させるのは情けないことである。「誠は天の道也、之を誠にするは人の道也」と中庸が説くように、人事の限りを尽くして、所謂天の道を人の力を以て輔けていくという考えが常になくってはならない。陰難を乗り越えて泰平に引き戻すは人間の道であり、人間の仕事である。

現代の人々の重大な誤りの一つは、むやみに個人の幸福や享樂を追求する事である。いかに生きるかということは、いかに楽しむかであり、それを人間の幸福と考えてしまい、苦勞や犠牲を避けるようになったところにある。長い目で見れば、苦勞や犠牲を避ける中に本当の幸福や楽しみはない。幸せの語源は「仕合う」。仕え合う、和合するところから幸せは生まれる。人間の真の幸福や楽しみは、むしろ進んで自己を何ものかに捧げ、他者と和合していくことによって得られるものである。

これは、とかく簡単に物事を割り切って自分都合で完結するように考える人々にあって、本当に反省しなければならぬことである。

今月も来年も健康と健闘を。

●十千

【甲】↓鎧。今まで寒さのために鎧／鱗／殻をつけていた草木の芽が、その殻を破って頭を出したという象形文字。甲拆(かいわれ)という自然現象。これを人事に展開すると、旧体制が破れて革新の動きが始まることを意味する。これを実践的に考えると、旧来のしきたりや陋習を破って、革新の歩を進めなければならない、創造を伸ばせ、ということを教えている。また「狎れ」にも通じて、とかく狎れ合いやすいので、十分慎まなければならない。

【乙】↓「甲」で出した芽が、まだ外界の寒気、抵抗が強いために、真っ直ぐに伸びることができずに曲折している。草木の芽が曲がりくねっている象形文字。どんなに紆余曲折を経ても、それを進めて行かなければならない。

【丙】↓「乙」より進んで陽気が発展した象。丙は「炳(あきら)か、つよい」を意味するが、文字の成り立ち「一・冂・人」が示すように、一は思い切って伸びる陽気、冂は囲い、物盛んなれば衰える道理で、陽気が増えの中に入り隠れ始めることを意味する。物事が明らかになつてくると、人間は色々心配するようになる。そこで丙に心をつけて「うれえる」という文字ができてくる。物事は盛んになりっぱなしということはない。生命・創造のはたらきというものは無限の循環である。生命力が伸びて成長するということは、同時にこれは老衰することに通じる。盛んなる陽気は段々と内に入っていくことを表す。また、入れなければならぬ。反対に衰えるということは、やがてまた盛んになるという生の未来を含んでいる。衰えだからといって落胆するのは、道を知らない者のこと。群衆と混乱ではダメだから、活動には組織・権力・支配力が必要。それは非常に明らかな事で、物事がよく分かなければならない。それは同時に非常な心配なことでもある。

【丁】↓在来(さいらい)の勢力を意味する時は、丁壮(さかん)、丁当(あたる)。丁の上の「一」は、つまり、従来の代表的な動き、主流がまだ続いていることを表し、丙の上の「一」の続きと見てよい。下の「一」は在来(さいらい)の勢力に対する新しい動きを表し、新旧両勢力の衝突を意味している。説文学から言うと、丁の下の「一」は幹を表し、上の「一」は木の上(うへ)部、従ってその枝葉の茂りを表す。「丁」「未」のこれらの枝葉を刈り取り、根固めをして、採光風通しを良くしなければならない。

【戊】↓茂。前の「丁」に続いて、陰陽繁雑する意。思い切って剪定しなければならない。

【己】↓物が形を曲げて縮まり蔵れた象。外物に対して内なる自身、即ち「おのれ」を表し、五行では土(五行の中)を表す。糸筋を分けること、糸のもつれを伸ばし、乱れを正しておさめる意。即ち紀である。己のおのれは他に対して屈曲し、悪がたまり乱れやすいから、反省し、これの筋を通して紀律を正しくしてゆくべきことを表した。己に克ち己を正し、断固として道を行うべき機運である。悪いとは知りながら、強い余裕を見つけては異常の生活に僅かに享樂をしているというのでは民族も滅亡する。

【庚】↓更に通じ、更新を意味し、なおまた継ぐ・償うの意味を持つ。①継承・継続、②償う、③更新の三つの意味がある。つまり、前年からのものを断絶することなく継続して、いろいろの罪・汚れを払い清めて償うと共に、思い切って更新していかなければならない。革命にもつていかずに、進化にもつていくこと。

【辛】↓「上」「求める」「一陽のエネルギー」とを組み合わせた字。人間で言えば男性。上に向かって求め冒す意味である。今まで下に伏在していた活動エネルギーが、色々な矛盾抑圧を排除して上に発現する文字。従ってそこに矛盾・闘争・犠牲を含むために、「つらい、からい」という意味も出てくる。前年の「庚」を受けて、更新することを断固として実行してゆかなければ、必ず殺傷を含む、からい目、つらい目に遭う。だから、自分の心を改めて、自新・更新してゆかなければならない。そうしないと、下からの突き上げによって、殺傷を含む色々の不祥事(からき目)が起こる。

【壬】↓内在するものが増大する形。孕む、即ち妊娠の姿であり、重い荷物を担う(荷う)・引っ提げる・事にあたる(任)をも表している。従って、「責任を荷う、任務を受ける」意味となった。社会で諸問題が一層増大して、その為に任務・仕事益々惹起してくる。従って、それを立派に処理する人物がどんどん出てこなくてはならない。が、私欲・野心を逞しくする人物の方が多く出ると見なくてはならない。正しい人・善人・君子は引っ込みがちになる。しかし、大任にあたる人は、勇気を出して小人に負けないようにやらないといけない。人事(国政上)が非常に大切な年。この年の重大事(壬申の乱、五・一五事件等)は、人事の乱れがその一つの基因。「中」は進むということ、本来はいい事だが、その進歩発展の過程でどうしても中毒を起こしやすい。

【癸】↓この古字は「水、四方より地中に流入する形」。季節でいえば冬枯で、草木も落ちて測量に便利であるから、手偏をつけて「揆(はかる)」意味に用いた。説文解字によると、「癸」は冬になって草が枯れ、木々の葉が落ちて、見渡す限り遮るものがない冬枯れの景色の中に、それまで隠れて見えなかった四方の水路がはつきり表れてきた、その形を象った文字。従って、見通しが良く測量するのに便利だから、「はかる」という意味がある。と同時にものを測るには基準になるものが要るから、「基準・法則・筋道」というような意味にも用いられる。また、測る時は人の手が加わるから、手

偏をつけて「揆」という字が生まれた。人間が人工を加えて、原理・原則・法典・憲法に基づいて、いろいろ企画を立てる、「はかる」意味となる。揆は全ての問題に一貫しなければならぬから、「揆一」となる。またその揆の一番大きなものは政治であり、その基準は宰相であるから、揆には大臣・宰相の意味もある。この「揆一」がひっくり返ると、いわゆる百姓一揆などと言う時の「一揆」になる。為政者が墮落して基準にならなくなると、揆を一に戻せと言う事で一揆が起こる。法則・原理・基準に照らしてはかり、企画・政策を立てて、一致協力してどんどん実行していくこと。

●十二支

【子】↓増える、孳・滋(しげる)意味で、いよいよ問題の処理に当たらなければならない。事にあたる人物の人数が問題になる。

【丑】↓「又」と「一」の合字で、母のお腹の中にいた子供が外に出て、右手を伸ばした形。今まで曲げていたものを伸ばすというところから、事を始めんとする義を表すとされ、「はじめ」と読み、また丑は「紐」で、結ぶ意とし、養う意ともする。「始める・掴む・結ぶ」意。「子」に発生したものが、やや長じ、これを整え養い伸ばすものである。

【寅】↓「ウ冠」は、建物・組織・存在を意味し、真ん中部分は「人」が差し向かいになって手を合わせる、約束する・協力する」象形で、下の「ハ」は「人」である。つつしむ意。また寅は「演」に通じ、進展を意味する。手を合わせて確約する意味。「進む・敬する・慎む・助け合う」意である。志を同じくするものが相約し、敬し慎んで時務を進めねばならない。そうして初めて人間は進歩する。しかし、物事は進んでいる時に失敗するものだから、「恐れ慎む」ことが大切。その上で、威厳があり力強く、時に凄みを持って進まなければならない。あくまでも虎であって猫のようではいけない。

【卯】↓未開墾地の開拓。この字の二筋は門柱、両側は門扉を開いた形。つまり、従来手をつけていなかった未開拓地を思い切って開発してゆく形。卯は茆で、茅(かや)・薄野(すすき)等の茂みを表す。正卯の刻は午前六時。夜が明けて活動を始めねばならぬ時。

【辰】↓理想に向かって辛抱強く、かつ慎重に、様々な抵抗や妨害と闘いながら歩を進めていく。「卯」を受けて、「手で落石を動かす、中身を出して動かす」象と見る説もある。季節は春から初夏。ここに来て物事が活発になる。非常に活動的・振動的・情熱的になる。人間にとって気分・気持ちが悪く暗いということほどいけないことはない。この漢字の中の「二」は、上・天・神・理想を表す字で、振・伸・震と相通ずる。易では「震為雷」。非常に騒がしい動揺があるが、もう一つ実がない。まかり間違えば、思

いがない変化・災禍を生ずる。

【巳】↓今まで冬眠をしていた蛇が春になって、そろそろ地表に這い出す形を表した象形文字。地中生活・冬眠生活を終えて、新しい地上活動をすること。従来の因習的生活にケリをつけて、雄々しくやっていくこと。その意味で「巳(や)む」に等しい。そういう弾力的な創造的な発展の精神が無くて、固まってしまったというのが「己」「自己」である。ありきたりの、意気地のない、或いはだらしない、誤魔化しの生活に見切りをつけて、勇敢に澆刺とやってゆかなければならない。ケジメをつける。片付ける。

【午】↓この字の上の部分は地表、下の十の一は陽気で、一陰(二)が下から突き上げて陽を冒して地表に出ようとする象形文字。反対勢力の高まりを示す。だから、「午は忤なり」で、「そむく、逆らう」という意味になる。

【未】↓「丁」と同様の意味があり、分解すると「一」と「木」で、一はやはり木の上部・枝葉の繁茂を表す。しかし、枝葉が繁茂し過ぎると暗くなるから、「未」を「くらい」とも読み、昧に通じる。未は暗くなりがちだから、不昧でなければならぬと言うことを教えている。不昧とは、繁茂した枝葉末節を払い落として(物事を省いて)風通しを良くし、生々たる生命を進展させるために明るくすること。止めてはいけない。従来の好ましい勢力が伸びていくように努力していくこと。

【申】↓伸に同じ。「未」に続いて陰気が「伸びる」意。方角では西南西、時刻は午後四時。

【酉】↓酒甕を表し、甕の中に溜まっている麴の醗酵を表す象形文字。中に醸されている新しい勢力の爆発、これは新しい革命勢力が作られることを表す。革命の年。醗酵を表し、「成る・熟する・飽く」の意味となり、時刻では午後五時から七時、季節では中秋、方位では西を表す。

【戌】↓戌の戌は茂に同じく、一は陽気を意味し、草木茂る中に陽気を蔵するもので裁成の意味がある。即ち、枝葉末節が茂って、日当たりが悪くなり、風が通らなくなることで、過剰・抹消的繁雑を表す。剪定して残っている「一」の陽気を生かしていけば、まだまだ続くということである。※「戌(じゅ)」は「まもる」という意味で「戌」とは別字。

【亥】↓「核なり。百物を収蔵す」。起爆性エネルギー活動。何事かを生もうとしている。様々なエネルギーや問題を孕んでいる。